

僕ら小学生、屈託のない日々

酒匂の大松明

灯火管制で明かりを隠して過ごす必要が無くなってから、この地域のお祭りや行事の華は、何といっても酒匂川の土手で行なわれる収穫祭の大松明だった。

燃えやすい葦や稲むらなどを細めに割った竹材で包んで長い筒状にしたものを土手に立てると、5'、6メートルほどの高さになる。それが数メートル間隔で十何本も、しかも二百メートルほど離れた対岸の土手の上にも連らなった。

そしていよいよ暗くなった夕暮れから火が点けられ、火の粉を飛ばしながら立つ夜の松明群は雄壮で気高く現実離れた世界を現した。その松明に見入りながら、僕らは神妙な思いに浸ったものだ。

しかしその行事はとっくの昔に無くなって仕舞った。あれほどの準備をするには、余りに人・もの・金がかかって、それを維持する力や情熱が地域に無かったのだろう、とても残念に思った。

あの頃、

遊びは家計の助けにもなった

海は僕らの暮らしの範囲には無く、代わりに酒匂川が代表的な遊びの舞台となった。

夏の終わりから秋の後半に掛けて川が暴れる時以外は、泳ぎや魚釣りに熱中した。支流の小川で獲ったウナギやドジョウ、ナマズも遊びがてらであったが、家の食卓にのった。特にウナギと田んぼのタニシが好きだった。ウナギは今では高額になってしまったが、旨

さは当時も格別だった。タニシは醤油で煮詰めて食べた記憶があるが、サザエに似た食感であった。近所では、このタニシを料理屋や旅館に売って日銭を稼いでいた人もあった。

また刈り入れ後のイナゴも貴重な蛋白源として、学校の課外授業となっていた。しかし、僕は最初に食べたイナゴの羽根が上あごにへばり付いてしまつて往生し、それがトラウマ体験となつて、唯一嫌いな食べ物となつた。

周りにあるもの全てが、
遊びの対象となつた

木登り、かくれんぼ、缶蹴り、相撲、梅の木などを刀にしたチャンバラ、またカエルを餌に蛇を釣つたり、面白がつて昆虫を集めて炒めたりもした。これらの決して「汚れなきいたずら」と云えない非道は、今でも心が痛む思いをする。

夏場は何といつても**川遊び**、特に泳ぎに熱中。海は遠くて馴染みが無く、プールなど無論無い。

川幅は河川敷を入れて二百メートル以上。浅瀬の流れがあるとところに放り込まれて鍛えられ、日本伝来の抜き手や平泳ぎ、背泳ぎなど身につけた。抜き手は、手足は現在のクローリングとほぼ同じ動きだが、顔を水面から出したまま正面を向いて泳ぐ。水に濡れないように衣類や武器を載せるために編み出された忍者の泳法と聞く。

そして上手になつてくると「砂利穴」と呼んだ背丈より深い淀みで遊んだ。この砂利穴は建設用に河川敷などで砂利を採取した跡の深い水溜り、戦前から盛んに掘られたもので、云わばプールだ。

水面と深みでは水温が際立って異なり危険なのだが、周囲に何の柵もなく、注意書きなど無いところが多かったため、水事故も

たびたび発生し、注意を要した。

僕らはこの「砂利穴」は飛び込み禁止にしていたが、ここで泳げるようになるのが自慢であった。

この頃、外の遊びは自宅の上級生と一緒に、何の遊びも縦社会の慣わしで、良きにつけ悪しきにつけ教わっていた。川の遊びも注意すべきところは上級生から伝えられていたのだろう、身近な仲間からは事故にあう者は無かった。

野球も流行った。

未就学の頃のボールは手作りで、小さな石ころを芯にして布地をぐるぐる巻きにし、あとは糸を丁寧巻いて作った。結構硬めであった。バットも太目の梅ノ木を使い、軍手をグラブ代わりにした。それがいつからか、ズック製（帆布Ⅱ厚手の布）になった。

なお、今道君は頂き物のようだったが、革製のクラブを着けていたと後年聞いた。

僕の得意は2種類のカーブと直球のみ。学校が引けてからいつも自宅の広場で相手を座らせて投げた。

後に、この肩が他校との石合戦で役立つことになったのだが、自慢できることでない。

（続く）